

論文

救貧問題と名望家の再編

— ニューヨーク貧民化防止協会（一八一七—一八二三）の盛衰 —

松原宏之

キーワード

社会福祉 初期アメリカ共和国 結社

はじめに

(一) 転機の救貧

一八一七年末、一八二二年戦争後の不況下で困窮民が
いっそう数を増す中で、ニューヨーク市に貧民化防止協
会 (Society for the Prevention of Pauperism in the City of
New York、以下 S P P) が発足した。この結社 S P P の
関心が、困窮民の支援というよりも、かれらが救済に依存
すること (pauperism) であったのをおさえねばならない。

依存心の助長を批判して、S P P は貧者の自助自立を唱え
た。¹⁾

以後の救貧政策にとって、この結社の役割は大きかった
と諸研究はみている。S P P が示した貧困問題の理解と対
処の枠組みは、一八二四年のニューヨーク州議会に提出さ
れたいわゆるイエーツ報告へと継承される。設定されたの
は、高齢者や障害者など労働に就けないものについては救
貧院に収容する一方で、それ以外の救済を抑制し、貧者個
人の自助努力を求めめる方針であった。他都市での動向と連

動して、SPPの提起は一九世紀末までのニューヨークそして全米の救貧対策の指針へと引き継がれていく。^②

社会福祉史の整理に即せばSPPは、一九世紀末に立ち上がる福祉国家体制によって乗り越えられるべき自由放任主義の尖兵と位置付けられる。キリスト教の影響下にあった伝統的な貧民観が世俗化していく。産業社会が到来し、それにふさわしい労働倫理の内面化が求められる。救済の代わりに貧者自身の責任を問ひ、産業社会にふさわしい労働倫理の内面化と自助努力を要求した先駆がこのSPPだという叙述である。^③

（二）自由放任主義の時代へ？

しかし初期共和国期の研究成果に照らせば、この見方は短絡と言わざるを得ない。本稿はSPP像の更新を図るものである。

一九世紀初頭は、世俗性や産業社会の論理だけが全面化するというよりも、アメリカ革命前との連続性と断絶性との干渉からなっていた。政治革命はひとつの面期だがそれはより長期の過程的一幕であり、いわゆる市場革命も市場経済の万能を意味しなかった。^④ SPPの試みを自由放任主義の産物と一括するまえに、この過渡性をみなければならぬ。

実際、SPPには新旧両世代が入り交じっていた。SPPの立ち上げを主導したのは、産業資本家ではなく、一八世紀末から活躍をつづけた名望家であった。この結社には新世代の実業家や中間層も参入したが、ただちに産業家でもなければ、資本家の論理で考えたわけでもなかった。むしろ救貧を義務と考えた新旧の名望家がはたしてどのような救済の転換を唱えたのかを検討せねばならない。^⑤

この作業は同時に、狭義の救貧史でなく、「名望家」の政治史・社会史へと接続する。既存の名望家たちは、伝統的な義務の観念に沿うとともに、名誉ある市民として自らの地位を確認しようとした。新しいアクターもまたSPPへの関与を通して名望家的な名誉ある地位を獲得しようとした。この結社は、貧困という公共的課題への対処を通して参加者たちが自らの地位を再編し、あるべき社会を模索する場であった。

この過程で、SPPは多面的な顔をみせる。たしかにSPPは貧者への厳しい要求も表明したが、富裕層のあり方を問ひ、貧困の原因とおぼしき社会状況への批判も垣間見せた。SPPのありようは通説が言うよりもはるかに複雑であり、その複雑さがSPPを一八二三年末に解散に追いやる。

本稿は、単に自助を求めただけでなかったSPPの活動

の幅を再現したい。それはSPPを歴史的文脈に置き直し、狭義の救貧史にとどまらない社会的地位の再編劇として読み直すことになるだろう。これはまたしばしば特権視されるSPPの位置を相対化し、当時の諸潮流の一環に置きなおすものとなるはずである。SPPという場を介して、ニューヨーク市社会の公共圏になが起き、またなながおき損ねたのかをあきらかにしたい。

一 SPPの誕生と展開

(一) 救貧体制の危機

SPPが結成された一八一七年末、イギリスのエリザベス救貧法を引き継いできたニューヨーク州の体制は、ニューヨーク市においてもその根幹で限界を露呈していた。

ニューヨークは、植民地期の相対的に安定した小共同体ではなくりつつあった。人口はいまだ一〇万人強とはいえ、三万人に満たなかった独立戦争直後からすれば四倍増である。水の確保に苦しみ、伝染病が蔓延し、行政には立ち後れが目立った。ニューヨークは手入れの及ばない大都市になりつつあった。

かつてたがいが顔見知りで生活空間をともにした町は、多くの流入民によって相貌を変えていった。貿易取り扱い

の大量化や製造業の伸張は、社会関係にも影響を及ぼした。拡大家族として生活をともにしてきた商人と奉公人や親方職人と徒弟とは次第に職場でのみ顔をあわせ、それ以外の生活時間では行動範囲を分かち始めた。ニューヨーク社会の世話人を自負してきた富裕な名望家たちにとつて、労働者たちは素性の知れぬ他者へと姿を変えていった。

人口の増加とともに困窮者もまた増えていった。一八世紀末からくりかえされた黄熱病の蔓延はそのたびに経済活動の停止を招いた。交易量の減る冬期は労働者たちにとつて苦しい季節であった。職を求めて男たちがニューヨークの外に出る動きもあいまつて、事実上の寡婦や孤兒などに貧窮を強いた。そして、一八一二年戦争後の不況が数年にわたって手痛い打撃を及ぼしていたのが一八一七年末であった。一八一七年二月に結成された臨時市民委員会は、住民の七人に一人に及ぶ一万五〇〇〇人が公的・私的な救貧に依存したと概算した。

一八世紀末からの三度にわたる増設で収容人数を倍にしてもなお救貧院が不足しただけではない。救貧関連費は市予算の四分の一近くを占めて最大の支出費目であり続けていた。支出額は増加傾向にあり、一八世紀末からみれば倍々増の勢いであった。一八一二年戦争後の不況下で事態はいっそう悪く、一八一七年五月設置のニューヨーク市特別

救貧問題と名望家の再編（松原）

委員会の報告によれば、院外救済や慈善団体への給付を含めて一二万五〇〇〇ドルの税金が救貧に費消されていた。^⑤

あらわになつたのは、この従来の救貧体制の限界であった。多くの北部都市と同様に、ニューヨーク市の救貧体制はエリザベス救貧法にならつていた。居住区内の高齢者、病者、障害者といった就労不能者を救貧院に引き受ける一方で、区外からの貧民については原住所への送還で済むこの体制は、小共同体での相互扶助を基本にした。救貧院に収容されない失業者や寡婦、遺棄児の増加は、慈善の対象ではあつても、対応は抑制的になりがちであつた。^⑥

(二) 古典派経済学の貧民像

こうしたなかで、同じく救貧体制の危機にあつたイギリスでの議論が影響力をもつた。アダム・スミスやトマス・マルサスといった経済学者たちは、救貧法がさだめる居住権規定が人の移動を制約して、自由な労働市場をさまたげていると批判した。救貧は淘汰されるはずの貧者を生き延びさせる。この過剰な人口が、賃金とひいては生活水準を切り下げ、社会に不幸をもたらすと言うのである。エリザベス救貧法体制の基礎にあつた重商主義的な哲学に対して、市場の自律性を尊重すべしというレッセフェールの思想が攻撃をしかけた。^⑦

この自由放任思想はアメリカ社会でより積極的に受容されたと歴史家トラットナーは言う。フロンティアの存在が、求めれば仕事はあるという確信を支えた。プロテスタンティズムの倫理は、富者の義務としての慈善を称揚する一方で、勤勉や儉約を実践しない者を批判する素地となつた。労働者たちの飲酒習慣や安息日の軽視に眉をひそめ、かれらは救うに値するのかと疑う者にとつて、古典派経済学の視点は説得的であつた。

一八一七年一月のニューヨーク市特別委員会報告は、貧民たちの実情について疑義を隠さなかつた。官民の種々の救貧活動につけこむようにして「救済への依存が怠惰と放蕩のシステムへと肥大しており、これは是正されねばならない」と提言した。「怠惰と濫費の生活だけを目標とする人びと」が「公共と慈善結社の庇護」をむさぼる状況は看過できないと述べ、給付経路の一元化などの方策を探るべしと唱えた。^⑧

(三) 貧民個人の責任を問うSPP

この文脈に照らして先行研究は、SPPの関心が救貧というよりも救貧体制の転換であつたと結論づける。

同協会の事務局で中心的な役割を果たしていくジョン・グリヌコムが結社発足直後の一八一八年二月に発表した報

告は、救貧の新しいあり方を提言した。その主題は、慈善的な救済の対象であった貧困 (poverty) や貧民 (the poor) でなく、恒常的に救済に依存する状況 (pauperism) であった。報告書は従来の「誤った慈善」における「野放図な救済」がもたらす害悪を批判し、「公的救済における方針の大きな転換なしには」救済を求める声は増殖し続けつついは社会秩序の崩壊をみるだろうと断言した。^⑤

グリスコムは一〇点におよぶ貧困の要因を挙げたが、その中心は貧者たちの無知や怠惰であった。知性の欠如は肉体的な力の適切な發揮を妨げるのであり、生来のものとは明言しないものの、これはしばしば移民にみられる現象だとされた。グリスコムによれば、怠惰は生来のものであり、「いったん慢性的になると、家族に害を及ぼし、社会の勤労者の多くに負担をかける」のであった。^⑥ こうした基礎的資質は、過剰な飲酒といった罪や悪徳、浪費癖、性的不摂生としての早婚、一攫千金を狙った富くじへの依存といったかたちで現れる。質入れの慣行についても、それが計画的に財産を用意していくことを妨げて人びとの自立心を損なうとグリスコムは論じた。

(四) 一八一八年二月報告後の忘れられた SPP

しかし関連史料を一望すれば、貧民に自助自立を求めた

SPP という像からは、一八一八年から二一年にかけての展開が抜け落ちることに気付く。この時期の SPP は困窮の社会的要因に注目し、その是正を模索していた。先行研究がもっぱら着目した一八一八年二月報告だけでなく、この一八年途中からの局面とあわせて考えて初めての全体像をとらえることができるのではないか。

SPP 発足の一年後に出たのが第一回年次報告書である。一八一八年二月報告書を執筆したグリスコムは欧州視察旅行に出ている。その間の事務局長を務め、一八一〇月の第一回年次報告書を書いたのはジョセフ・カーティスであった。このとき三六歳、いわゆる名望家でなく、事務員としてマンハッタンで働き、奴隷解放運動にも関わった人物である。^⑦

二月報告書が無知と怠惰という性質を問題にし、貧者個人に困窮の責任を問うたとすれば、この一〇月の第一回年次報告書は大きく異なる論理で整理された。救済に頼ることなく働くべきという主張は保ちながらも、貧困の原因とそれへの対処はについて見立てが変わった。

迷いのない二月報告とは対照的に、第一回年次報告書の冒頭は、なにが SPP の目的と方法なのかへの逡巡から始まる。その上で同年報は、現状の調査、物乞いになる原因の除去、貧者の状況を改善する方法の策定と実施を目指す

と述べた。^{①②}

二月報告が「無知」と「怠惰」を根本原因に挙げたのと似通うように、この第一回年次報告書においても貧困の原因として真つ先に挙げたのは「怠惰と雇用」であった。しかし見出しに反して、その中味は「怠惰」には言及しない。「怠惰と雇用」担当委員会の目的は、貧者にいかに雇用に供給するかについての方法だと明言したのであった。

同年報は続けて飲酒、富くじ、売春宿、質屋、賭博場無知などを貧困の原因として挙げていくが、要点はそうした悪徳にふける貧者の非難でなく、現状の調査要請であった。すなわち、酒小売店の所在や、飲酒量、価格の調査を必要事項として挙げ、最後にようやく飲酒の影響を受けやすい市民とはどういった者が問われた。富くじ販売所の場合、くじの引受業務がもたらす害悪、法規制の現状が調査されねばならないとした。無知の問題についても、貧者生来の欠損が関心でなく、不就学児童や文盲成人が生まれる理由が焦点であった。いずれも貧者の生得的な怠惰や内面を責めるのでなく、貧者をとりまく環境要因の調査をこの第一回年次報告書は表明した。

一八一九年末の第二回年次報告書は一八年二月報告書を執筆したグリスコムがヨーロッパ視察から帰国してふたたび筆を執ったが、その方針は前年を踏襲している。

一八一九年一二月末に開催された第二回年次大会で示された見立ては第一回年報に続いて、アメリカに貧困がないと思うのは間違いだと明言した。必要なのは原因の調査であり、予防と対処だと論じた^{①②}。

同時期に提出されたS P P「怠惰と雇用」小委員会報告書とあわせてその意図を補うならば、アメリカにあっても職を失うこと、職に就けないことがあり、貧困を怠惰の帰結と即断することはできないと言う。同報告書によれば、とくに女性たちの状況に即して、彼女たちを怠惰だと非難するのは見当違いであった。彼女たちははたらく能力をもっており、就労する意欲ももっているが、彼女たちが生計を立てうるような職がそもそも存在しないというのである。同報告書は、州や市に対して財源を求め、富裕層への劇場税の賦課を提言し、労役場をふくむ職の創出こそが必要だと論じた^{①②}。

この見立てにしたがって、この第二回年報からは一八年二月報告にみられた怠惰批判は項目としても姿を消した。代わって困窮原因の筆頭に挙げられた無知の問題は、子どもが教育を受けられないことの帰結として整理される。少なくとも二万一〇〇〇人の不就学児がおり、うち八〇〇〇人は教育へと導くいかなる経路ももっていない。成人の識字能力などについては不明としながらも、移民の存在も

念頭に状況は樂觀できない。さらに、ニューヨーク市内二万五〇〇〇世帯のうち一万五〇〇〇世帯がミサに通っていないとも指摘し、そうした家庭は子どもたちに教育機会を与える契機を失っていると第二回年次報告書は判じた。

以下第二回年報は、飲酒、質屋、富くじ、売春宿、賭博場など全七項目を問題事象として挙げるが、このそれら諸現象を貧民の生得的な資質の現れとはみない。飲酒、儉約心の欠如、そして不道徳をSPPは困窮化の要因とみなすが、年報が関心を寄せるのはそうした行動が誘発される条件であった。

SPPの調査は具体的であった。飲酒問題については酒がもたらす弊害を列記した上で、法や条例とその執行状況が確認される。酒類販売免状を税収源とみる行政が飲酒の抑制にはむしろ消極的だと調査は結論づけた。州議会および市議会の対応を求めた上で、具体的な免状発給の抑制策などを列挙した。他の項目についてもほぼ同様に調査結果の紹介と提言とが組み合わされた。年報全体として、住民に対する教育、不品行を抑制するための方策の提言、貯蓄銀行への預金を奨励し、そのうえで労働者の自立をうながそうというのである。こうした論調は、一八二一年はじめの第四回年次報告書まで引き継がれた。

一八年二月報告とは様変わりであった。救貧で貧民を甘

やかすことなかれと説き、貧民の自己責任を厳しく求めたSPPは、社会的要因の改良へと焦点を移したのである。

二 SPPとは何だったのか

(一) 民衆の福祉と政体の正統性

痛烈な自助自立要求と、他方での困窮の社会的要因への目配り。この幅広さは、通説的なSPP像に再考を求めめる。貧困問題への対処としては対極的とも思える提案が出てくる事情を、視野を広げてこの結社の歴史的役割から考えてみたい。鍵は、SPPを狭義の救貧史・社会福祉前史に押し込めないことである。救貧結社であるとともに、初期共和国下ニューヨークにおける政治的・社会的な舞台であったのがSPPである。

ことが貧民の増加と救貧予算の逼迫にともなう自己責任論と自由放任主義の登場といった単純な話であったかは疑わしい。ウィリアム・ノヴァクらの指摘を援用するならば、一九世紀末の社会福祉国家・社会政策国家の登場に先だって、一八世紀末以来のアメリカの諸都市には行政、司法、結社による社会政策的な規制が張り巡らされていた。産業家の台頭にもなう自由放任期への移行という図式に疑義を呈して、ノヴァクはそこに公式・非公式の規制が作動す

る社会を見た。¹⁹⁾

そうした規制網が敷かれたのは、困窮や生存の問題が、政体の正統性や支配層の権威と不可分であったからである。当時のニューヨーク社会にもみられた貧困、伝染病、消防の不備、水資源の不足、不道德の蔓延といった兆候は、指導層の信認にかかわるゆゆしき事態であった。住民の生活水準という指標は革命以前からひき続き存在したばかりでなく、革命後の新政体の成否を占う意味でいっそう重要であった。

この文脈で、ニューヨークの救貧体制が単に支援の量的な不足というよりも構造的な危機にあったことは注意を要しただろう。従来の抑制的な救貧体制は、貧者の急増に対応する論理を欠いていた。マンハッタン南部の旧市街区に集中して常連の信徒たちの支持に安住した既存の教会も、新住民を信徒団に加えるのに積極的ではなかった。出身地や職種ごとに編制されていた同胞組織的な慈善からこぼれ落ちる者も無視し得なかった。従来のパッチワーク的な救貧網は構造的な限界を露呈し、指導層は正統性の危機にあった。²⁰⁾

一八世紀末に始まったのは、この救貧と政治的正統性の穴を衝いて、いくつもの救貧結社が登場する事態であった。寡婦と子どもを対象に一七九七年に発足したイザベラ・グ

ラムの救貧協会を嚆矢に、多くの救貧結社が誕生した。かつて名望家たちがごく少数の結社を運営していたニューヨークには、一八一八年までに六四もの結社が誕生していた。それら新興結社のひとつの特徴は、名望家にとどまらない多くの結社員をかかえることである。かれらはかならずしも家長でなく、しばしば女性であり、独身者であり、専門職であった。既存の体制が対処できない基礎的福祉の問題に取り組んで、従来の政治過程や教会では発言権に乏しかった者たちが公共圏に乗り出していく契機を見いだしつつあった。救貧事業は、困窮者への喫緊の援助であるとともに、初期共和国下ニューヨークにおける公共圏の再編劇でもあった。²¹⁾

SPPが誕生したのはまさにこの状況下であった。この結社は、単に貧困問題への対処を図るだけではあり得なかった。困窮者の待遇をめぐってアメリカ革命後ニューヨークの政体と、その指導的担い手が誰なのかという問いが問われる中で、SPPはこの結社間競争に割って入ったのである。

(二) SPPの担い手は何者か

SPPの立ち上げに動いたのは名望家層であった。一八一七年一二月、SPPの発足会合に顔を揃えたニュー

ヨークの名士たちである。革命の英雄マシュー・クラークソンを議長に据え、有力慈善家デイヴィー・ベスーンを事務局長に指名した。憲草案の策定に、トマス・エディ、ジョン・グリスコムほか七名が選出された。役員に就くことは辞退したものの、名望家ジョン・ピントードもこの会合に参加している²⁰。先行研究が指摘するように、かれらの多くは一八世紀末以降に市民結社を牽引してきた名士たちである。篤志家として知られた資産家ジョン・ミュラー・ジュニアから、ニューヨーク州知事ドワイト・クリントン、キャドワラダー・コールデン、ステファン・アレンら新旧市長、ニューヨーク市議会からの派遣役員まで、初期共和国期ニューヨークの指導層とおぼしき顔ぶれと言える。台頭する新興の救貧結社群に名望家たちが対抗した格好であった。

この文脈で、SPP結成宣言とも呼べる一八一八年二月報告を理解することができる。従来の「誤った慈善」における「野放図な救済」を批判し、「救貧における方針の大きな転換」を唱えたのは単に救貧の方法にとどまらない射程をもったSPPは乱立する草の根的な慈善結社を批判して自らの差配の下に置きなおそうとしたのであり、ひいては政治的主導権の奪還を図ったのである²¹。

ただし、この「名望家」たちの地位と構成とには変化が

生じていた。アメリカ革命を経て、疑似身分制的な地位の保証は失われた。州議会・市議会の議席数が増し、投票資格も緩和され、新規参入者が現れた。経済的にも流動化は進み、大土地所有それ自体は地位を担保せず、市場経済への参加を深めるうちに没落する者もいた。他方で経済的成功を手がかりに名望家層への参入をうかがう者も登場する。新興実業家、小地主、職人、知識人らが、クリントン家に代表される媒介的な名望家たちと連携して台頭した。少数者支配がゆらぐとともに、どういった人びとにまで参政権を認め、主導的な市民とみなすかをめぐって闘争が進行した。救貧事業への民間結社の参入はこのひとつの現れと言える²²。

家門や土地所有が社会的地位を保証しないこの初期共和国下ニューヨークにあつて、社会的地位はなんらかの意味で可視化され、承認され直す必要があつた。市民的・名望家的な義務としての救貧事業への関与、SPPという結社への参入は、新旧の名望家たちが「名望家」たることを再帰的に保証する行為であつた。

SPP創設の立役者と言われるトマス・エディ、ジョン・ピントード、ジョン・グリスコムはこの名望家層の過渡性・流動性を象徴する三名である。かれらの経歴は、この市民結社への献身が社会的地位の構築に有用であつたことをう

かがわたせる。それはまた、かれらにとって貧民の規律は名望家層自らの再建と対をなしており、下層民管理だけに注目してはSPPとかれらの活動を理解しそこなうおそれを示唆する。

トマス・エディ（一七五八〜一八二七）は押しも押されぬ財界の顔役であった。現役の金融・政治ブローカーであり、エリー運河開発を主導し、ドウィット・クリントンの懐刀として州都オルバニーとマンハッタンを往来していた。敬虔なクエーカーでもあったこの人物は、経済的な成功だけで満たされず、名望家的な責務を自らのものとしてSPPを含む人道主義的な諸活動に参加した。

もともと、このエディが革命期・市場革命下のニューヨークでのし上がったことに留意すべきである。独立戦争時には駆け出しとしか言い様のなかったこの人物は、その戦争でアメリカ側につき、戦後の債権事業という新分野で財を築いた。

この意味で成り上がりとも呼ぶべきエディは、名望家だからでなく、名望家にふさわしいリスペクタビリティを築くために市民的結社への献身をはじめたと言えるであろう。ニューヨーク病院の再建をはじめとする各種の事業に関わることで、エディは既存の名望家たちとの関係を深め、敬意を獲得していったのである。辣腕実業家と呼びうるエ

ディの自伝が、その篤志家的な面をもっぱら強調したのもこうしたふるまいと一致している。²⁶⁾

ジョン・ピントード（一七五九〜一八四四）は自他ともに認める名望家であった。母方の祖父からの遺産を元手に中国・インド貿易に関わり、ニューヨークでもっとも成功した商人と呼ばれた。一七八七年には保険業界でも地位をつかむ。政界においても、若くして独立戦争に身を投じて戦後の足がかりをつかみ、一七八九年からはニューヨーク市議員を務める。名望家的・市民的責務をつよく自覚した人物であり、ニューヨーク歴史学協会の創始者の一人としても知られる。一八〇五年には、ニューヨーク市内における義務教育制度の嚆矢と言えるフリースクール制度からアメリカ聖書協会の立ち上げまで、ピントードが貢献した事業は数多い。²⁷⁾

ピントードにとって、SPPの立ち上げはこうした責務の一環であった。初年度は役員までは引き受けなかったピントードだが、一八一八年一〇月の第一回年次大会では富くじ委員会の委員長を引き受け、貯蓄銀行についての特別委員会にも加わった。「限られた数の公共心ある人びとの尽力のたまものですばらしい恩恵が生まれるのである。かれらは八万ドルもの救貧支出から市を救うだけでなく、勤労者コミュニティの環境を改善し、かれらのモラルを向上

させるのだから」と誇り、そこに参画する自負を記した。²⁸⁾

注目すべきは、この名士ピントードが没落を経験していたことである。富の絶頂にあった一七九二年、いまだ債務問題に苦しむ連邦政府の公債引き受けスキームに加わったピントードはそのスキームの頓挫とともに莫大な借金を負った。同年に負債者監獄に収監されたピントードは全財産を失い、一七九七年から翌年にかけてふたたび収監されている。再起を期して奔走したピントードが市の監査役の職を得て一息ついたのはようやく一八〇四年のことであった。一八〇九年に保険会社役員に選任され経済的な安定を得るが、彼がかつてのような富を取り戻すことはついになかった。

窮地にあつたこのピントードが、市監査役の職を得ただけにニューヨーク歴史学協会の発足に取り組んだのが興味深い。経済面だけではなく公共善への貢献の再開と対になってはじめて、その復権は成し得ると考えたと見て良いだろう。一八〇四年はようやく定期的な収入源を得た過ぎず、その後も経済面では完全復活に至らなかつたわけだが、ピントードは公共的な事業への参加を強めていった。エディとは対称的な軌跡を描くピントードだが、公共善への献身を重視する点では共通していた。彼にとつて、貧困問題に対処することは、名望家として義務であるとともに、

名望家としての地位を回復する行為であつた。「人道と慈善のための仕事の山に取り組もうという気概と能力を備えた自立的な市民はあまりいない」のでなかなかこうした務めをやめられないとこぼすピントードはまんざらでもない。たとえ経済的には見劣りをして、公共の務めをいくつもこなす自分こそが自立的な市民と言えるからである。²⁹⁾

SPPの事務局を切り盛りしたジョン・グリスコム(一七七四―一八五二)に目を転じれば、彼がいわゆる名望家でなく、財産もなく化学教師として一八〇七年にニューヨーク市にやってきた専門職であることに気付く。専門知を易しく噛みくだく力量にすぐれ、公開講座で評判を取りながら、スポンサーを募って高校を開設し、大学にも教職を得て多方面で活躍した。³⁰⁾

四〇代はじめて精力的なこの人物にSPPの事務局長が託されたのはごく便宜的な面もあつただろう。多分に名譽職のだった初代のベスーンに代わつて、実務に時間を割いても良いという格好の人材がグリスコムであつた。他方グリスコムにとつても、SPPへの関与はニューヨークの名望家サークルに食い込むうえで有用であつた。自伝草稿を元に編集されたグリスコム評伝にもうかがえるように、自身の数々の事業への資金を得るためにも、彼の地位上昇にとつても、厳然と存在する名望家層の知己と支援とを得る

ことは重要であり続けた。公共の福祉に関わる結社への参加は、彼が名望家層の一員となった証しであるとともに、名望家的な地位を獲得するための足がかりであったと言えるだろう。

ちょうどビンタードが新しい名望家市民像の構築を試みたように、グリスコムもまた財産の多寡にかかわらず名譽ある地位に就けるかを自他ともに納得させる必要があったはずである。便利なコマにとどまらず、伝統的な名望家たちと対等な指導者としてSPPに参画した自負をもつグリスコムは、その地位をいかに整合的に説明したか。これを問うておきたい。

グリスコムの貧民論がより広範な人間論になっていることに注目したい。一八一八年二月報告書のなかでグリスコムは、人のふるまいが「名声を大事にすること」や「友人や知人の称賛を得ようとする願望」に規定されることを「明瞭で基盤的な真実」だと断言した。この人間観はグリスコムに名望家たちと対等の立場を提供した。たとえ経済的には豊かでなくとも、公共善のために献身するグリスコムは名声を得るのであり、財産家たちとも対等で、恥じることなくリスペクタブルな市民だと言いつるのである。SPPに参加することの意義はここにあった。

かくしてこの結社は、大衆的な民間救貧結社に対抗する

名望家たちが主導した組織であるとともに、「名望家」の意味を再編し、より広範なひとびとが名譽ある指導的市民として参入を図ろうとする経路としても機能し始めたのである。

(三) SPPの志向

SPP登場の文脈とそこに加わった者の遍歴とをみると、この結社の多面的な姿を説明する手がかりを得られる。貧民の自助自立を求めたSPPは、貧民を切り捨てたのではなくた。SPPを主導したのは従順な労働者を欲した名望家層ではなかった。貧困問題への関心を継続させた名望家層が、困窮状態の悪化に対処すべく自ら結成の音頭を取ったのであった。かれら名望家にとって、自らの正統性への不信任を招きかねない貧困問題を放置することはできなかった。この課題を引き受けることは、足場が緩み始めていた旧来の名望家にとっても新興勢力にとっても自らの地位を確認する行為でもあった。救貧という取り組みのいっさいを市場経済に委ねればそれで済むという発想はここにはない。救貧の問題は「政治経済の興味深くかつ喫緊の対応を要する局面」であった。

ところがこの新旧名望家たちの継続的な関心にもかかわらず、SPPは救貧方法の転換を打ち出した。理念として

は救済されるべきであった貧民がいかにして自助自立すべき者になったのか。この変化が産業資本家が台頭する以前のニューヨークで起きた理由を説明せねばならない。

この転換は、S P Pに参加した新旧名望家たちが自己像を再定義したことに関わっている。S P Pを牽引した三名からうかがわれるのは、かれらが自らの地位を所与ではなく、S P Pへの参加を通じて確保すべきと見ていたことである。このとき、かれらの「名望家」性は世襲の財産などであらかじめ約束されたわけではない。経済的には名望家層から滑り落ちたピンタードが端的に述べたように、公共的な取り組みに参加できるほどには自立しており、その自由になる時間と労力をS P Pに割くからこそ彼は名望家的市民たり得た。たとえ成り上がりでも、没落しかかって、財産はなくとも、かれらはその公德心ある献身のゆえに名譽ある市民であった。所与の身分でもなければ財産の差でもなく、同じ人間であるがゆえにその振る舞いをもつてのみかれらは自らの地位を確認できた。

そしてこの発想こそが、貧民たちに自助自立の努力を求める基盤であった。S P Pの役員は名望家でありながら、自分たちと貧民たちとを別カテゴリーにいる存在とは考えなかった。財産の多寡にはかかわらず善行ゆえに誰とも対等な名譽ある市民たり得ると論じたことの裏返しに、貧者

もまた一方的にただ救済を受ける特殊な人間ではあり得なかった。グリスコムに言わせれば、たとえ貧民であろうと名声を尊重しうる同じ人間なのである。名声を重んじ、「自己の承認」や「人格」を備え本来的には同等の人間であるがゆえに、そのかれらが名譽ある自助自立でなく救済に依存するのをグリスコムは批判した。^②

つまり、新旧の名望家たちが共通の名望家性をつくりなおしたS P Pという結社においてこそ、一方的に救済されるべき貧民という存在は定義され直したのである。初期共和国期における名望家層の再編こそが、貧民像を描き直し、自助自立を求める契機になったのである。

このとき、名望家性の再定義と貧民像の再定義とは対であり、後者だけを取り出して論じるわけにはいかない。ダニエル・ハウがつとに論じたように、一九世紀にわかに貧民たちの規律が強まったという見立ては、一八世紀末の自己陶冶の精神が一九世紀にも継続したことをわからなくしてしまう。生まれながらの身分でなく陶冶を介して自己が生成されるという感覚があったからこそ、それが貧民という他者にもひとしく適用され、困窮者が救済に甘んじるのを良しとしない発想が生まれた。

さてこのことに留意すると、S P Pの関心が通説的に言われるものよりもはるかに広がったことにも説明がつく。

SPPは貧民から隔絶した名望家や中産階級の高みから下層民に自助を要求したのではなかった。

貧者に自助を求めたピンタードは、同時に富裕層を厳しく批判した。SPPの富くじ委員会での報告を準備しながら彼が懸念したのは、富くじ問題が貧民にとどまらない広がりを見せたことであった。富くじに魅せられて貯蓄のできない貧民は批判されるべきだが、より深刻なのは、暴利を求めてその富くじの胴元になる富裕層であり、財源として当てにするがゆえに有効な規制をしない州議会であった。胴元でありながら不正を働いた名望家や、名望家にもさわしい生活を維持できずに身を崩した他家の事例などもピンタードの懸念的であった。名望家への世論の信頼が失墜しかねない状況にあって、富くじや同じく投機の対象にされがちであった保険業の是正にSPPが力を尽くすべきだと考えた³⁴。

ここに矛盾はない。名譽ある市民として自らの地位の再建を図り、同様の自己研鑽を困窮者にも求めたピンタードは、金儲けに執着するばかりで公共的責任を果たさない富裕層にも自律を求めた。名望家風の浪費的な生活を追い求めて不正に手を染めた名望家子弟の事件をピンタードは苦々しく手紙に記している³⁵。ピンタード率いる富くじ委員会や貯蓄銀行委員会は、貧者に儉約や貯蓄を求める一方で、

経済的利益や税収だけを追った野放図な富くじへの牽制であり、利潤追求に終始しない労働者のための銀行業への試みであった。

グリスコムを手がかりにみたSPPの啓蒙主義的な人間観についても、その帰結は複層的であった。貧民の自助自立を求めたグリスコムは他方で、この本来は同じ性向をもつはずの人びとが困窮に沈み、救貧に頼るならば、それはいったいなぜかという問いに向き合わざるを得ない。かれら貧民は生来的に依存的な存在ではないはずだからである。そのかれらをして困窮と救貧への依存にとどめおく要因はかれら個人の資質に求められるとは限らない。社会的要因へと目が向く契機は十分であった。したがって、ヨーロッパから帰国したグリスコムが一八年二月報告とは一見すると大きく異なる第一回年次報告書の論理構成を踏襲して第二回年報を執筆するとき、グリスコムはそこに矛盾を見なかったであろう。第一回年報を受けもったジョセフ・カーティスら事務職あがりではSPPに加わった人びとともにもグリスコムは、従来の恩恵的な救済とは異なる、社会的な貧困の是正という論理を手にしたと思われる。名望家から貧民までが同じ人間だという理解は、貧民の自助努力と社会的是正の双方へと開かれていたのである。

三 浸食されるSPP

(一) 一八一八年二月報告後のSPPと日曜学校

しかし、論理のうえででは背中合わせとはいえず、スペクトラムの一方の極から他方へとSPPがその方針を振ったのはなぜか。一八一八年二月報告では自助自立要求を掲げたこの結社がそのわずか八ヶ月後には貧困の社会的要因へと視線を切り替えられたのには具体的な契機があったように思われる。ここに着目して、SPPの活動を当時の救貧をめぐる状況のなかに位置づけてみたい。

SPPが転進した契機を直接に示した史料は見当たらないが、一八年二月報告と同年末の第一回年次報告とのあいだになされたSPP小委員会による現地調査をこの変化の要因とみることはできよう。当初から貧困化の原因をさぐるべく調査の重要性をかかげていたSPPは、二月報告書で列挙した問題点を確かめるべく小委員会を立ち上げた。小委員会は編制を調整しつつも、一八年一〇月と一八年一二月の二回の年次大会に報告を寄せた。つまり、一八年二月までにジョン・グリスコムがいわば机上で書き上げた報告書は、その後の実地調査で検証を受けたのである。

この小委員会についても、その詳細を記した史料は現存しない。ただし、調査を実際に引き受けた協力者として第

一回年次報告書が短く謝意を記したのは、ニューヨーク市日曜学校連盟の訪問委員会のメンバーであった。⁽³⁶⁾ SPPはその調査を外外部組織に委託したのである。

(二) 変容するSPPと日曜学校

SPPがその調査をニューヨーク日曜学校に委ねたことは、SPPの力量とSPPを取り巻く当時の状況を考えさせる。

いきさつを伝える史料は残っていないが、想像には難くない。名望家主導で立ち上げたSPPには実働部隊が少なかった。ニューヨークの路地へと分け入るにはほかの組織の力を借りる必要があっただろう。

日曜学校協会はすぐに思い浮かぶ候補のひとつだったはずである。エディやピントードをはじめ、同協会の創設に力を貸した名望家たちは多かった。ニューヨーク市内の不信心者への宣教を目的とした日曜学校と、貧者の生活態度に疑問をもっていたSPPとの親和性は高い。日曜学校に子どもたちを呼び込もうとコミュニティへの働きかけを強めた協会員には土地勘があり、そのかれらにSPPが調査を依頼したとみて無理はない。⁽³⁷⁾

この時期いつせいに発足した日曜学校、聖書協会、トラクト協会といった結社は、当初は主流派教会の巻き返しと

して登場した。公定教会という地位を失った教会は、信徒と財源とを求めて、個別具体的な課題に即した結社の立ち上げに打って出た。この意味で、ミツシヨン系結社は既存の体制の護持・補完を目的としたと言える。名望家主導で始まったSPPとも歩調をともした。⁽³⁸⁾

ところが、この結社という新しい組織は次第に変質していった。男性家長にしか発言権のなかった教会とちがって、女性、独身者、無産者、ときには自由黒人らが発言の機会を得た。年報やニューズレターの読者そして書き手として、意思決定の一端に加わった。具体的な日々の課題への取り組みを求められるなかで、名望家たちが独占していた結社は変貌を遂げていく。それまでは無視されてきた社会的課題や不正義が組上に載り、これら福音主義結社には体制批判的な側面が生まれてもいったのである。⁽³⁹⁾

はたしてこの日曜学校協会の変化にSPPは同調できたのだろうか。

日曜学校協会員の調査を下敷きにした年次報告書は、SPPの執行部がひとまず協会員の言い分を受け入れたことの意味するだろう。先述したSPP内部で生まれた貧困象の変化に照らせば、これは了解できよう。一八一八年二月報告が描いた生来的に無知で怠惰な貧民像とは異なるもの、名望家サークルに新しく食い込もうとする人びとは人

間像の再考を進めていた。大覚醒の影響は広範に及んでおり、神の前に立つ一個人という感覚は多くが共有していた。自らが模索していた平等な人間を基礎にした考えに照らして、人が困窮状態に陥る社会的な理由に視野を広げ得たはずである。二月報告書を執筆したグリスコムが、帰国後の第二回年次報告で考えをあらためているのはひとつの証左と言えるだろう。

ただしここにジレンマはなかっただろうか。エディ、ピントード、グリスコムは名望家像の再編を図ったが、そもそものは一八世紀末的な名望家結社を念頭に置いたと思われるSPP結社員の全体がはたしてこの変化を受け入れ切れたのかについては留保が要る。当初SPPは救貧にかかわる民間結社の林立に対抗して登場した。それは直接には諸団体の救済を無分別だと批判し、貧民の自立を要求する運動であったが、同時に、公共圏に割り込むように叢生した諸結社に対抗する名望家層の反撃という側面を持っていた。日曜学校の変化を推し進めたような体制批判色を旧来からの名望家たちが歓迎したのかは疑念が残る。

旧来の名望家から、新興の実業家、知識人、事務員、さらには提携先の日曜学校協会的一般会員まで、SPPはそのウイングを広げていった。この拡大と再編こそがSPPの活力の源である。この拡大はしかし同時にSPPの方向

性に混乱の芽をはらませなかっただろうか。本稿は、次節で一八二二年半ばからのSPPの再転進をみながらこの疑念に検討を加えたい。

四 SPPの頓挫と縮小

(一) 再転進と縮小

一八一八年二月報告後に貧困の社会的要因に着目したSPPだが、その意欲は一八二二年半ばに急速にしぼんでいく。この意味を考えねばならない。

SPPの指導層に変化はないが、一八二二年末の第五回年次報告書を執筆したのはマネージャーのなかでも弱冠三三歳のエレゼア・ロードであった。一八一五年にニューヨーク日曜学校同盟の設立を牽引したこの気鋭の改革者は同時にやり手のビジネスマンでもあり、一八二二年にはマンハッタン火災保険会社を設立して巨額の富を手に入れた。その後も一八二六年にはアメリカ国内宣教協会の設立に貢献する一方で、一八三二年にはニューヨーク・エリー鉄道会社の設立を主導し、翌年には社長に就く。新旧名望家が集うSPPらしい人物と言えそうである。

ロードの手になる報告書は、SPPの再転進を示している。意気軒昂だった前回から一転して報告書は諦念を表明

した。「これまでの経験からして、この町にたしかに存在する貧困の原因について、その除去や阻止には権力が必要であり、一民間団体にできることはない」と言明して、結社たるSPPには手に負えない問題として貧困問題を位置づける^④。

代わりにロードが提案したのは、徹底した自助である。「公的な救済が得られる希望を捨てざるを得なくなる」状況をつくれば、「自らの努力を恃みとするしかなくなる」だろうという言い様は、社会的要因に着目した三年ほどのSPPの方針からは大きな変化である。貧者の生来的な怠惰といった言い方まではしないものの、「飲酒を控え、浪費をやめ、しらふで勤勉で質素であるなら、大多数の貧者の健康、安寧、美德はもつとも根本的に促進されるであろう」という見通しは、一八一八年二月報告書段階への回帰を示した。女性や子どもへの貧困への配慮を言いはしつつも、たとえ一時的には困難を生んでも貧者たちの自立、就労、生活習慣の立て直しを求め、現行の救貧制度は解体されるべきと述べた^⑤。

以後、SPPはこの自助路線を進んでいく。とくに注力したのは、青少年の更生事業であった。一八二二年に公刊された報告書を皮切りに、SPPは少年感化院の設立へとその主軸を移していく。エディやグリスキムのほかに若い

救貧問題と名望家の再編（松原）

世代からもチャールズ・ハインズといった役員が加わって、男女が年齢も問わずに雑居していた感化院のあり方を批判し、とくに青少年が年かかさの貧民や非行者・犯罪者から悪影響を受けることを問題視した。イギリスの動向を見ながら、可塑性のある青少年のうちに保護施設に収容して懲罰でなく更生を図ることを提案した。SPPは一八二三年末の年次大会でこれを承認し、ニューヨーク少年感化協会への移行を決定した。SPPはその看板をおろし、少年感化院の運営へとその活動を限定したのであった。

（二）原因と帰結

転進・縮小の直接の契機は、SPPが提案した酒販売規制、質屋規制などを市議会が受け入れなかったことにある。発足当初から市議から五人を理事に迎えて、半ば公的な結社として活動してきたSPPだが、その提案がそのまま立法化されることはなかった。市議会議事録によれば、一八二一年一月にSPPから提供された酒販売免許関連法案が検討され、貧困問題への有効性不明を理由に却下されている。議論の詳細は不明だが、市にとって貴重な財源であり、許認可権という利権でもあった酒販売免許の抑制という提案は、市財政にとっても、市議にとっても、また酒販売業者にとってもたやすく呑めるものではなかったと思

われる。イブニング・ポスト紙へのSPP匿名理事の寄稿はSPPのいらだちをうかがわせる。ドイツにおけるSPP的な試みが成果を挙げていると指摘しながら、寄稿は、立法化を阻む企業と議会の不作為を厳しく批判した。このニューヨーク市にあつてはSPPの提案が市議会の支持を得られず、法案は骨抜きにされてしまうというのである。ロードが諦念を表明することと符丁があう。

もつともこの立法上の困難だけが、SPPの方針そのもの変更には直結するかは腑に落ちない。意気盛んだったSPPであれば事態の打開を図ってもおかしくはないからである。ところがむしろ、SPPは貧者の自助自立路線へと戻ってしまった。ここでも史料には欠落があるが、従来の名望家とは異なる層を次々に加えていったSPPがいつにその内的な多様性を受け止めきれなくなった結果がこの再転進だったのではないだろうか。名望家たちが対抗しようとしたはずの草の根福音主義者との連携といった思いがけない事態は、それを受容できない層との緊張をはらんでいただろう。立法化の頓挫を契機にその緊張が表面化してきたとは言えないだろうか。

こうした混乱のなかで、SPPが自力で具体的に取り組めたのがニューヨーク少年感化院の開設であった。第一回年次報告から数次にわたって唱えられた広範な社会政策が

実現せず、また調査ひとつをとっても他団体に依存せざるを得ないとき、青少年に対象を限定してその更生を図る事業は魅力的だったと思われる。

おわりに

一八一七年発足の貧民化防止協会（SPP）は貧民たちの自己責任を問う自由放任主義的な救貧政策の先駆とされてきた。しかしながら、この描写は単純化がすぎる。SPPは、産業資本家が主導権をにぎる以前に新旧の名望家たちが集った過渡的な結社であった。名望家的な責務の念を抱いた人びとがいかにして伝統的な救貧観の転換へと踏み出すことになるのか。見るべきはこの過程である。

新旧名望家たちの経歴とふるまいに注目すると、SPPの多面性が浮かび上がる。SPPはたしかに自助を要求した。しかし救貧史に視野を限るときに見落とされたのは、SPPが単に貧民規律の結社でなく、人間像再編の場だったことである。進化したのはアメリカ革命後の名望家層の再編であり、新たにリスペクタブルな地位を得ようとする実業家、知識人、事務職員らの参入であった。財産がなくとも、自らの名声を大事にしようとする志向が尊敬されるべき市民の資質であり、この資質は誰にも共有されるべき

ものとされた。この自立的・自律的な個人という人間像が、それまでもつぱら救済の対象であった貧民にも自己責任を問うという転換をもたらしたのである。

そしてまさにこの論理が、SPPの目を、一見すると対極的な貧困像とも思える困窮の社会的側面へも開いた。新旧の名望家たちが試みたのは、市民的義務を自覚してSPPに参画することで、リスペクタブルな地位を確保することであった。この自己研鑽の志向は、怠惰な貧民への厳しいまなざしにもつながるが、他方で自堕落で無責任な富裕層への批判を含んだ。また、貧困の社会的な要因を探ろうとする契機もここにあった。ともに名声を重視するはずの同じ人間が困窮し、無知や怠惰に沈むとすれば、それはなぜなのかと問う理由が生まれるからである。本来は自律するはずの者にそうさせない環境要因は何かと問うことになった。通説に反して、SPPもまた社会的要因を調査し、その是正のための施策を模索したのであった。このとき、SPPは日曜学校協会をはじめとする在野の福音主義的な勢力とも接点をもっていた。貧民の自助を求めたとされるSPPは、同時に酒の流通を制限し、投機的射幸心を抑制する多くの社会政策を提言した。

もつともSPPは、この双極の振れ幅を最終的には受け止めきれなかったと思われる。直接には、市議会がSPP

Pの立法提案を拒否したことでSPPは進路を閉ざされた。この困難を打開するほどの一体性を發揮することはできず、SPPはその社会政策的な志向を放棄した。貧民の雇用から生活にいたるまで広範な調査と未熟ながらも社会政策の萌芽を育てつつあったSPPは手じまいして、単独で青少年の教育にあたることを選択した。一八二五年のニューヨーク少年感化院開設である。

さてこのことは、ニューヨークひいては全米の救貧施策が貧民の自助自立の促進へと収斂したことを意味するのだろうか。SPPは自助自立を当初かかげ、最終的には青年の更生努力をうながすという貧者個人の責任を問う路線へと帰着した。このことだけをたどるならば先行研究のSPP像には一定の妥当性がある。しかし本稿が示したのは、このSPPが内在的にかかえた社会的なものへの関心の存在であった。SPP内部ではついに全面化しえなかったこの志向は、啓蒙主義的な平等な人間像、共感可能な人間像を体得しつつあった者にはたしかに保持され、SPP外のニューヨーク日曜教会をはじめとする諸結社において育ちつつあった。一九世紀ニューヨーク市の救貧の実態をみようとするなら、短命に終わったSPPは必ずしも唯一の代表的系譜とは言えない。こうした知見は、貧者への自助自立要請にとどまらなかった別の救貧の系譜を含めた研究の

拡張と再統合とを求めているのである。

註

- (1) Society for the Prevention of Pauperism in the City of New York (hereafter SPP) and John Griscom, *Report of a Committee on the Subject of Pauperism* (New York: Samuel Wood & Sons, 1818).
- (2) ウォルター・トランプトナー(古川孝順訳)『アメリカ社会福祉の歴史―救貧法から福祉国家へ』川島書店、一九七八〔一九七四〕年；M. J. Heale, “The New York Society for the Prevention of Pauperism, 1817-1823.” *New-York Historical Society Quarterly* 55, no. 2 (1971); Paul S. Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1978); Edwin G. Burrows and Mike Wallace, *Gotham: A History of New York City to 1898* (New York: Oxford University Press, 1999), chap. 30; Seth Rockman, *Welfare Reform in the Early Republic: A Brief History with Documents*, (Boston Bedford/St. Martin’s: 2003), 15-21.
- (3) トランプトナー『アメリカ社会福祉の歴史』第三～四章；Michael B. Katz, *In the Shadow of the Poorhouse : A Social History of Welfare in America*, 10th anniversary ed. (New York: BasicBooks, 1996); Rockman, *Welfare Reform in the Early Republic*.
- (4) Jack P. Greene, “Colonial History and National History: Reflections on a Continuing Problem,” *The William and Mary Quarterly* 64, no. 2(2007).
- (5) William J. Novak, *The People’s Welfare: Law and*
- Regulation in Nineteenth-Century America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996); Barbara M. Tucker and Kenneth H. Tucker, “The Limits of Homo Economicus: An Appraisal of Early American Entrepreneurship,” *Journal of the Early Republic* 24, no. 2(2004).
- (6) Raymond A. Mohl, *Poverty in New York, 1783-1825*, (New York.: Oxford University Press, 1971); John Duffy, *A History of Public Health in New York City* (New York: Russell Sage Foundation, 1968).
- (7) Elizabeth Blackmar, *Manhattan for Rent, 1785-1850* (Ithaca: Cornell University Press, 1989); トムソン・D・チャペルマン(鳥羽欽一郎、小林製薬治訳)『経営者の時代―アメリカ産業における近代企業の成立』東洋経済新報社、一九七九年(一九七七年)。
- (8) Mohl, *Poverty in New York, 1783-1825*, 116.
- (9) *Minutes of the Common Council of the City of New York* (hereafter MCC) 11(1821), 474-75; MCC 9(1817), 360-62; *Journal of the Senate of the State of New York at Their 47th Session* (1824), 98-108, Appendix A.
- (10) Hidetaka Hirota, *Expelling the Poor: Atlantic Seaboard States and the Nineteenth-Century Origins of American Immigration Policy* (New York: Oxford University Press, 2017).
- (11) トランプトナー『アメリカ社会福祉の歴史』四五～五〇、五〇～五三頁；Rockman, *Welfare Reform in the Early Republic*.

- (51) MCC 9(1817), 361; Library Committee of the Pennsylvania Society for the Promotion of Public Economy, *Report of the Library Committee of the Pennsylvania Society for the Promotion of Public Economy* (Philadelphia: Printed for the Society, 1817).
- (52) SPP and Griscom, *Report of a Committee on the Subject of Pauperism*, 3-4.
- (53) *Ibid.*, 5-6.
- (54) SPP, *The First Annual Report of the Managers of the Society for the Prevention of Pauperism in the City of New York* (New York: 1818).
- (55) *Ibid.*, 3-4.
- (56) SPP, *The Second Annual Report of the Managers* (New York: E. Conrad, 1820).
- (57) SPP. Committee on Idleness and Sources of Employment, *Report to the Managers of the Society for the Prevention of Pauperism in New York by Their Committee on Idleness and Sources of Employment* (New York: 1819).
- (58) Novak, *The People's Welfare*; William J. Novak, "The Myth of the 'Weak' American State," *American Historical Review* 113, no. 3(2008): Gergely Baics, *Feeding Gotham: The Political Economy and Geography of Food in New York City, 1790-1860* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 2016).
- (59) Kyle B. Roberts, *Evangelical Gotham: Religion and the Making of New York City, 1783 - 1860* (Chicago: The University of Chicago Press, 2016), Ch. 3.
- (60) *Ibid.*; Johann N. Neem, *Creating a Nation of Joiners: Democracy and Civil Society in Early National Massachusetts* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2008).
- (61) SPP and Griscom, *Report of a Committee on the Subject of Pauperism*, front page; John Pintard, *Letters from John Pintard to His Daughter, Eliza Noel Pintard Davidson, 1816-1833*, ed. Dorothy C. Barck, vol. 1 (New York: Printed for the New-York Historical Society, 1940), 96-98.
- (62) Albrecht Koschnik, "Let a Common Interest Bind Us Together": *Associations, Partisanship, and Culture in Philadelphia, 1775-1840* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2007); Mohl, *Poverty in New York, 1783-1825*, 127-33.
- (63) John L. Brooke, *Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson from the Revolution to the Age of Jackson* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010); Evan Cornog, *The Birth of Empire: De Witt Clinton and the American Experience, 1769-1828* (New York: Oxford University Press, 1998).
- (64) David Waldstreicher, *In the Mist of Perpetual Fetters: The Making of American Nationalism, 1776-1820* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997).
- (65) Samuel L. Knapp, *The Life of Thomas Eddy, Social Problems and Social Policy: The American Experience*

- (New York: Arno Press, 1976 [1834]).
- (27) Dorothy C. Barck, "Introduction," in *Letters from John Pintard to His Daughter, Eliza Noel Pintard Davidson, 1816-1833*, ed. Dorothy C. Barck (New York: Printed for the New-York Historical Society, 1940).
- (28) *Letters from John Pintard to His Daughter, Eliza Noel Pintard Davidson*, vol. 1, 151-52.
- (29) *Ibid.*, vol. 1, 155.
- (30) John H. Griscom, *Memoir of John Griscom, LL. D., Late Professor of Chemistry and Natural Philosophy: with an Account of the New York High School; Society for the Prevention of Pauperism; the House of Refuge; and Other Institutions* (New York: R. Carter and brothers, 1839).
- (31) SPP, *The First Annual Report of the Managers*, 6.
- (32) SPP and Griscom, *Report of a Committee on the Subject of Pauperism*, 12; Daniel Walker Howe, *Making the American Self: Jonathan Edwards to Abraham Lincoln* (New York: 2009 [1997]).
- (33) Howe, *Making the American Self: Jonathan Edwards to Abraham Lincoln*.
- (34) *Letters from John Pintard to His Daughter, Eliza Noel Pintard Davidson, 1816-1833*, vol. 1, 151-58, 93.
- (35) *Ibid.*, 154, 57, 59.
- (36) SPP, *The First Annual Report of the Managers*, 6.
- (37) Anne M. Boylan, *Sunday School: The Formation of an American Institution, 1730-1880* (New Haven: Yale University Press, 1988), chap. 1.
- (38) Clifford S. Griffin, *Their Brothers' Keepers: Moral Stewardship in the United States, 1800-1865* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1960); Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920*, chap. 3.
- (39) Neem, *Creating a Nation of Joiners*; Koschnik, "Let a Common Interest Bind Us Together"; Michael P. Young, *Bearing Witness against Sin: The Evangelical Birth of the American Social Movement* (Chicago: University of Chicago Press, 2006); Elizabeth B. Clark, "The Sacred Rights of the Weak": Paim, Sympathy, and the Culture of Individual Rights in Antebellum America," *The Journal of American History* 82, no. 2(1995); Carroll Smith-Rosenberg, *Religion and the Rise of the American City: the New York City Mission Movement, 1812-1870* (Ithaca N.Y.: Cornell University Press, 1971); Boylan, *Sunday School*, chaps. 1-2.
- (40) SPP, *The Fifth Report of the Society for the Prevention of Pauperism in the City of New York, Read at the Anniversary Meeting of the Society, December 17, 1821* (New York: Printed by J. Seymour, 1821), 5.
- (41) *Ibid.*, 20-27.
- (42) Robert S. Pickett, *House of Refuge: Origins of Juvenile Reform in New York State, 1815-1857*, 1st ed. (Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, 1969), 46-50; SPP, *The Sixth Annual Report of the Managers of the Society for the Prevention of Pauperism in the City of New York*,

救貧問題と名望家の再編（松原）

Read and Accepted, February 7th, 1823 (New York:
Printed by Mahlon Day, 1823).

(3) *MCC 11*(1821), 454; *New York Evening Post*, Aug. 30,
1821.

（本学文学部教授）